

「椎の葉に盛る」考：有間皇子伝承像・続

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1988-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 富吉 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1546

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



「椎の葉に盛る」考

——有間皇子伝承像・続——

川 上 富 吉

一 はじめに

「大妻国文」第十八号（昭和六十二年三月刊）に、「有間皇子伝承像」と題して、『万葉集』の巻第二挽歌部冒頭の有間皇子の二首、

有間皇子 自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首

磐代^{いはしろ}の浜松が枝を引き結び真幸^{まさき}くあらばまた還^{かへ}り見む（2・一四一）

家にあれば筥^へに盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る（2・一四二）

について、江戸初期の契沖の『万葉代匠記』以来、「題詞」中の「自傷」の背景として、『日本書紀』斉明天皇四年（六五八）十一月条の謀反事件の犠牲となって絞殺されたという悲劇的事件を背景として享受鑑賞されてきたことに關して、『日本書紀』に伝える有間皇子像と『万葉集』における有間皇子像との、伝承像のちがいについて考察した。その折、

「椎の葉に盛る」考

題詞「自傷」の持つ意味は作品鑑賞にとって不可欠の条件なのであって、有間皇子の二首の歌は題詞「自傷」の語がなかったとしたら、ただ単なる無個性的な旅の歌でしかないことを認めることができる。

さらに、題詞中の「松が枝を結ぶ」という条件も、一四一番歌にのみかわるわけではなく、二首目の一四二番歌をも規制する要素であることは言うまでもないことである。

と指摘しておいた。今回は、その第二首目の「椎の葉に盛る」の解釈・鑑賞を中心に私見を述べてみたい。

二、ふたつの説について

一首目の、一四一番歌は、

磐代の浜松の枝を引き結んで、さいわい無事でいられたら、また立ち帰ってこの松の枝を見よう、と思う。

という意味で、「松が枝を結ぶ」という呪術習俗―「結び」の信仰―を踏まえた歌と捉えられていることは、大方の見解が一致していることである。それにくらべて、二首目の一四二番歌の方は、大きく二説に分れている。今回は、現代、一般に流布通行しているものに限って概観してみることにする。

その一つは、

家にいると筥に盛る飯を、こうして心にまかせぬ旅にいたので椎の葉に盛って食べることだ。

(日本古典文学大系『万葉集一』昭和三十二年、高木市之助・五味智英・大野晋)
椎の葉で握り飯などを包むことはありえないことではない。

(日本古典文学全集『万葉集一』昭和四十六年、小島憲之・木下正俊・佐竹昭広)
旅の握飯(にぎりいひ)を盛ったか。(講談社文庫『万葉集^{金沢注}原文付(一)』昭和五十三年、中西進)

のように、「椎の葉に盛る」飯は、有間皇子が「みずから食べる」ものと解釈するもので、大勢を示している意見である。
その二つは、

家にいるときは器に盛って神に手向ける飯を、今は旅中であるので、椎の葉に盛って捧げることだ。

(旺文社文庫『^{現代語訳}万葉集(上)』昭和四十九年、桜井満)
盛って神に手向る、の意。(新潮日本古典集成『万葉集一』昭和五十一年、伊藤博)

盛って神に手向ける。(角川文庫『万葉集上巻』昭和六〇年、伊藤博)

のように、「神饌」^{注1}とみる説である。『旺文社文庫本』補注には、

松の小枝を結び、そこに自らの魂をいまいこめることによつて、無事を祈願する呪術があった(610冊・20冊10)。それは道の神に手向けをする時の一つの作法なのであって、松の小枝ばかりでなく、草を結ぶこともあった(110)。飯を椎ノ葉ニ盛ルということも、決して自分が食べるのではなく、道の神にお供えて、無事を祈っているのである

「椎の葉に盛る」考

る。

とあって、これに賛同したい。

三、神饌説をめぐって

こうした状況の中で、新しい研究成果を踏まえた万葉集の全注釈書として、『万葉集全注』全二十巻（昭和五十二）三年にかけて『万葉集を学ぶ』全八集を刊行した有斐閣）が企画刊行され、只今、続刊中である。現代の万葉研究者から秀れた研究者二十人が各巻別に分担して執筆するもので、学界の内外から注目されているものである。その中、『巻二』（昭和六〇年刊、稲岡耕二）では、

家にいる時は筥に盛って食べる飯を（草枕）旅に出ているので、椎の葉に盛る。

と解釈し、有間皇子がみずから食べるとする立場をとっている。そして、神饌説について別に「考」を立てている。長文であるが、全文を引用してみよう。

【考】 神饌説について この歌、普通は紀の湯へ護送される旅中のわびしい食事を詠むものと解されている。代匠記に「サラスタニ旅ハ佗シキヲ、殊ニ謀反ノ事ニヨリテ捕ハレテ、物部ノ中ニ打囲マレテオハシマス道ナレハ、萬引カヘタル様筥ニモル飯ヲ椎ノ葉ニ盛トヨマセ給ヘルニコモレリ。」と言ひ、講義に「事なくて家に在る時には然るべき

飯筥に盛りて食すべき飯をば、今は旅にあれば、椎の葉に盛りて食するが悲しく物あはれなる事よとなり」と言う。ただし戦後になって、皇子の食事でなく、岩代の神への供え物として椎の葉に盛ったと見る神饌説が一部に唱えられた。そのもっとも早いものは高崎正秀「萬葉集の謎解き」(文芸春秋昭和三十一年五月)である。その中に奈良では今でも小さな椎の葉に小量ずつお供物を盛り分けて神仏を巡拝してまわる風習のことが紹介され、「家にをれば、立派なちやんとした御器に盛つて、お供へするのだが、今は旅先のこと故、椎の葉に盛つて差上げます。どうぞ神様よ、御納受下さいませ」と「紀州磐代の道祖神の神前に供へて」旅路の安全と身の行く末を祈願した歌として詠まれるべきことが説かれている。奈良における習俗は歌人の高橋英子氏の語ったところと言う。この高崎説は、大養孝『万葉の旅』にも引かれており、また池田弥三郎・山本健吉共著『万葉百歌』の池田発言中にも同様な説が見られる。『万葉の旅』には神饌を葉に盛る習俗として、岩代の地でヒトゲという米粉のだんごを二つ、かしの葉に重ねて氏神に捧げる例が紹介されている。

神饌説は、珍しい習俗と関連しているし、また、有間皇子の結び松の歌(一四一歌)が岩代の神に対する祈りの歌ということもあって、たしかに興味深く聞かれるし、誰にでも理解され易いように思われる。高校の教科書などにも採用されている歌なので、教室で神饌説を通して皇子歌にはじめて接したという若い人達も少しずつ数を増しているようだ。

しかし、高崎説は、正しいのであろうか。皇子歌の「筥に盛る飯」は、神に供える飯なのであろうか。

この一四二歌の形式は「家にあれば…(A)…旅にしあれば(B)…」であり、AとBとの落差の大きさによって、旅先での悲嘆が強調されるところに特徴がある。わたしに疑問に思われるのは、道祖神に手向けをしつつ、それと対比的に「家にあれば…」と歌ったとする。神饌説におけるその発想自体と言ったら良からうか。

高崎説によれば、この歌は家で神に供え物をする場合(A)と、旅先で道祖神に手向けをする場合(B)とを比較して

いることになるが、道祖神への手向けが、故郷の家における氏神への神饌の御器を想起させ、しかも習俗として特定された木の葉に盛っているにもかかわらず、その粗末さが嘆かれるというのは、この作品の内部からではなく、むしろ外側から強いて構えた発想で、リアリティを欠いたもののように思われる。端的に言って「葉に盛る」習俗が岩代なら岩代に固有のものであればあるだけ、(A)と(B)とを比較し対照して歌うこと自体その抒情的必然性を乏しくするだろう。

この歌は神饌を歌ったわけではなく、捕らえられて紀伊湯へ護送される途中の食事の有様を、家に居ての食事と対比つつ淡々と詠じたものと考えられる。異常な迫力は、死を直視せねばならなかった皇子の立場の、おのずからなるあらわれであらう。茂吉秀歌に、

羈旅の不自由を歌つてゐるやうな内容でありながら、さういふものと違つて感ぜねばならぬものを此歌は持つてゐるのはどうしてか。これは史実を顧慮するからといふのみではなく、史実を念頭から去つても同じことである。これは皇子が、生死の問題に直面しつつ経験せられた現実を直にあらはしてゐるのが、やがて普通の羈旅とは違つたこととなつたのである。

とあるのは、彼の「写生」説に引きつけ過ぎてゐるくらいはあるが、迫力の生ずる所以を説いたものである。

と、その神饌説を紹介しながら否定してゐるのである。果してそうであらうか。いささか反辞を弄しておきたいと思うのである。

稲岡説の第一の難点は、引用明言はしていないが、契沖『代匠記』（精撰本）に、一四二番歌について、「端作ノ詞ハ此哥ハ叶ハヌ様ナレト、初ノ歌ヲ先トシテ云ヘリ。カカル事アヤシムヘカラス」として以来の通説によつてゐるらしく、題詞の枠組み「歌二首」とある点を故意に一首目のみに限定して鑑賞してゐる点にあるといえる。前稿でも力説したが、題詞というものは「一個の全作品の一部をなすもので、切り離しがたいもの」だ^{注2}という指摘もあるように、題詞は、一四一

番歌と同じ様に、一四二番歌にも「松が枝を結ぶ」という呪術行為をした時のものとして読みとるべきことは当然のこと
がらであると言えよう。

第二に、稲岡説の、一四二番歌の形式「家にあれば…(A)…旅にしあれば…(B)…」について、「AとBとの落差の大きさ」によって「神饌説における発想自体」が「疑問に思われる」とした、その「落差」は、高崎説の「立派なちゃんとした御器に盛って、お供へするのだが、今は旅先のこと故、椎の葉に盛って差上げます。」という表現を「その粗末さが嘆かれる」と読みとったからであろう。この点はたしかに、高崎説の一つの欠点であり、稲岡説の失考でもあるといえよう。「立派」とか「粗末」とかいう次元のことではなく、家にあつての神饌の器と、旅先における土地の習俗における神饌の仕方のちがひとしてとらえなければならぬものであると言えよう。さらに、AとBとの対比に関して、稲岡説は「(A)と(B)とを比較し対照して歌うこと自体その抒情的必然性を乏しくするだろう」とも言っている。「家にあれば筥に盛る飯」を、「旅にしあれば、その旅の、土地の、習俗に従つて、常盤木(手向草)である椎の葉に盛ることだ」、ということと比較対照させて歌うことが、果して「抒情的必然性を乏しくするだろう」か。旅の無事平安を祈る呪術行為として、神に何らかのものを手向けるのはごく普通一般の約束事であつて、当然の営為であり発想であつたとみるのが妥当だと言えるであらう。

神に祈願する際、捧げ物は必要不可欠な条件であつたはずで、特に、旅の安全や命の無事を祈る場合はなおさらであつたろう。ちなみに、記紀の説話の中で、この種の最大のものであるヤマトタケルをめぐる荒ぶる神と人身御供の話は援用してみよう。

『古事記』には、

其れより入り幸でまして、走水海を渡りましし時、其の渡の神浪を興し船を廻らして、得進み渡りたまはざり

「椎の葉に盛る」考

き。爾に其の後、名は弟橘比売命白したまはく、「妾、御子に易りて海に入らむ。御子は遣はさえし政を遂げて覆奏したまふべし」とまをしたまひて、海に入りまさむとする時、菅疊八重・皮疊八重・絙疊八重を波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。是に其の暴浪自ら伏きて、御船得進みき。爾に其の後歌曰ひたまはく、

さねさし 相武の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて問ひし君はも（記二五）

とうたひたまひき。故、七日の後、其の後の御櫓海辺に依りき。乃ち其の櫓を取りて、御陵を作りて治め置きき。

（『古事記』中巻、景行天皇）

とあつて後のオトタチバナヒメが「海の荒れるのは海神の怒りによるという考えから、人身御供となつて入水する」と、荒波も自然におさまりヤマトタケルは無事に対岸に着くことができた。また、『日本書紀』では、

亦相模に進して、上總に往せむとす。海を望りて高言して曰はく、「是小き海のみ。立跳にも渡りつべし」とのたまふ。乃ち海中に至りて、暴風忽に起りて、王船漂蕩ひて、え渡らず。時に王に従ひまつる妾有り。弟橘媛と曰ふ。穂積氏忍山宿禰の女なり。王に啓して曰さく、「今風起き浪溢くして、王船没まむとす。是必に海神の心なり。願はくは賤しき妾が身を、王の命に贖へて海に入らむ」とまうす。言訖りて、乃ち瀾を披けて入りぬ。暴風即ち止みぬ。船、岸に着くこと得たり。故、時人、其の海を號けて、馳水と曰ふ。

（『日本書紀』巻第七 景行天皇四十年是歲）

とあつて、オトタチバナヒメが、荒ぶる「海神の心」を慰めるために人身御供となつて入水すると、暴風は即座に止み、船は岸に着くことができた、と伝えている。

こうした記紀の伝承説話を背景として、有間皇子の「松が枝を結ぶ歌二首」は享受されるべきものではないだろうか。

第三に、稲岡説は、AとBを対比することは、「リアリティを欠いたもののように思われる」と言っているが、ここに一番大事な問題がある。この歌は、「神饌を歌ったわけではなく、捕えられて紀伊湯へ護送される途中の食事の有様、家に居ての食事と対比しつつ淡々と詠じたものと考えられる。異常な迫力は死を直視しなければならなかった皇子の立場の、おのづからなるあらわれであろう」と述べているが、「淡々と詠じた」歌でも「異常な迫力」のある歌もあり得るが、この一四二番歌が、果して、「淡々と詠じた」ものか、また「異常な迫力がある」のか疑問である。すくなくとも、「淡々」とではなく、「切々」と詠じたのだとみるべきであろう。「真幸くありたい」と願って「松が枝を結ぶ」という呪術行為をとる十九歳の皇子が、ムシャムシャご飯をたべていられるのであろうか。実在の生身の人間——歴史的事実——としては可能であろうし、実際たべたのかもしれない。親の葬式だからといって、たべないことはないのであるから。しかし、なかには親しい人の死に接して何日間も、ものをたべることができない人間もいるのである。しかも、これは歌の問題である。広くいえば文芸の問題である。「リアリティ」を「詩的眞実」をさして言うのなら、命の平安無事を神に祈る主人公が食事をとるというのはいかがであらうか。文芸は虚構性フィクショナルの上に成り立つ詩的世界という次元である。そこにあっては、悲劇は悲劇的要素を必要とするもので、悲劇の主人公が、ムシャムシャご飯をたべたのではその悲劇性はこわされてしまうはずである。それでは喜劇になってしまっておそれがある。やはり、この一四二番歌の「椎の葉に盛る」のは、みづからがたべるのではなく、神に手向けた神饌と見ることによって、その「詩的リアリティ」はたしかなものとなるのだと言えるのではないだろうか。

四、「飯」について

さらに、事実の問題として、「飯」を「椎の葉」に盛ってたべることの可否について考えてみよう。

「飯」を、「握り飯」とする説が多いが、当時、旅の携帯食料は「乾飯（ほしいひ・かわいいひ）」が通例であった。『伊勢物語』の名高い「から衣」の歌物語に、

むかし、男ありけり、その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国もとめて
とてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道しれる人もなくて、まどひいきけり。三河の国
八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八
橋といひける。その沢のほとりの木かげにおりゐて、かわいいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きた
り。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひけれ
ば、よめる。

から衣きつつなれにしましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ
とよめりければ、みな人、かわいいひの上に涙おとしてほとびにけり。

（『伊勢物語』東下り）

とあって、「乾飯」は旅行の携帯食や非常備蓄用で、干し固めた飯で、水や湯で戻して柔かくして食するものである。とすると、水や湯を加えるためには、あるていどの深みと広がりのある器物に入れて食べることになる。この『伊勢物

語」の話は、杜若の咲く夏五月のことであるから、腐りやすい「握飯」をさけて「乾飯」を携行したものだと思われる。有間皇子の場合は、冬十一月であるから、「乾飯」でなく、「握飯」でもいいのである。しかし、「握飯」だったとすると、罪人として護送中の囚われの身であれば、そのまま手づかみでたべたのであって、わざわざ食器や椎の葉に盛ってたべるという手間ひまをかける必然性はまったくないのだと考えるのが妥当であらう。まして、「乾飯」であつたら、椎の葉に盛って食べるということはちょっと無理であらう。^{注4}よって、「椎の葉」に「盛る」のは、有間皇子がみずからがたべるためではなく、みずからにとって大事な食料の一部を割いて、あるいはそのすべてを、磐代の神への手向けとしてさしあげるためにしたのであつた。こう読みとることによって、「松が枝を結ぶ歌二首」として、一四一番歌・一四二番歌の二首が緊密に相互補完して、有間皇子の悲劇的な状況と心情とを、リアリティにイメージアップすることができるのである。

五、おわりに

以上のように、「椎の葉に盛る」のは、みずからが食するのではなく、神への手向けであつたとする神饌説は補強し得たかと思う。

こころみに意識してみれば、

家にいる時は器に盛ってさしあげる飯を、旅にあるので、土地の習俗にしたがって、常磐木である椎の葉に盛ってさしあげます。どうぞご受納下さって私の願いをかなえてください。

ということになる。

本稿は、大妻女子大学国文学会第三十七回研究例会（昭和六十二年七月四日）において口頭発表したものを文章化したものである。

注1 神饌説の初出は、高崎正秀「万葉集の謎解き」（『文芸春秋』昭和三十一年五月）で、その後、梅木春和「椎の葉の飯」（『国語研究』二十八号、昭和三十二年四月）、池田弥三郎『万葉百歌』（昭和三十八年八月）、大養孝『万葉の旅』（昭和三十九年七月）などがある。

注2 武田祐吉『万葉集全註釈』（昭和三十一年七月）に、「この歌、死生のあいだに臨んで、しかも、よく落ち着いている。哀情が潜むように感じられるのは、皇子の不運な運命を、先に承知していて読むから、そう思われるのであらう。題詞というものは、一個の全作品の一部をなすもので、切り離しがたいものである。」とある。

注3 日本古典文学全集『古事記上代歌謡』（昭和四十八年十一月）頭註（荻原浅男）に拠る。

注4 「椎の葉」については、諸説あつて定説を見ないが、山田孝雄『万葉集講義卷第二』（昭和七年七月）に、

椎之葉爾盛 古来「シヒノハニモル」とよみ来れり。然るを童蒙抄は「椎」は「松」の誤かといへり。按ずるに、椎の葉に飯を盛るとは如何にすべきか明かならず。さて又、「椎」は普通に「シヒ」とよむ字にして和名鈔「椎子」の注に「和名之比」とあり、又日本紀神武卷には「椎根津彦」の名の椎に「椎此云辭訛」とあれば、椎とよむ事は不都合なるにあらず。されど椎は葉大ならぬものなれば、この上に飯を盛らむは如何にすべき事にか、考には「今も檜の葉を折敷て強飯を盛ことあるが如く旅の行方にてはそこに有あふ椎の小枝を折敷て盛つらん。椎は葉のこまかに繁くて平らかなれば、かりそめに物を盛べきもの也」といへり。然るに「椎」字は新撰字鏡を見れば「奈良乃木也」と注し、又續日本紀卷八に元明天皇を葬れる山陵を「大和國添上郡椎山陵」とかけるが、この天皇の山陵は延喜式に「奈良山陵」とあるによりて「椎」は「猶」の誤なりといひたれど、この山陵の所在は古の奈良山なる事著しければ「椎」を「ナラ」の語にあてしは、明かなり。されば、こゝも椎とよまれざるにあらず、又「ナラ」の葉ならば大にして今も山人の握飯を包み持つに用ゐる程なれば似合はしからぬにあらず。されど、今この歌は十月十一日の比によまれしなれば、檜の葉は直ちに得らるべくもあらねば、なほ常盤木の椎の方によるべくや。

とあるように「常盤木の椎」説が妥当であらう。